

資料

幼児の運動発達と生活環境に関する検討

近 藤 みづき

Relation Between Movement Development
of Infants and Their Life Conditions

Mizuki KONDO

SUMMARY

This is a pilot study on movement development of infants and their life conditions. The purpose of this paper is to consider how infants' life conditions including their parent's expectation are related to their movement development.

Subjects were parents of children at T kindergarten and the investigation was done by a questionnaire on life conditions, movement capacity, and expectation from the parent of infants. The children were classified into three groups by the ability of their movement task which their parents estimated, and each group was analyzed based on the questionnaire.

As a result, my future research topic on movement development of infants and their life conditions can be obtained.

キーワード: 幼児・運動発達・生活環境

はじめに

これは幼児の運動発達と生活環境に関するパイロットスタディである。

人間は他の動物と比べ未熟な状態で産まれる。出生時におけるこの人間特有の状態を Portmann は生理的早産¹⁾ であるという。「新生児の協調運動は泣くこと、吸うこと」²⁾ そして様々な生得反射のみである。生得反射が消えていく頃には随意運動が発

達してくるため、新生児の運動系の未熟さは、その後の環界^(註) との関わりにおいて様々な運動を習得する大きな可能性を秘めており、子どもの運動能力が長期的な低下傾向にある昨今においては、子どもが習得していく運動形態の内容や運動する機会の重要性に関心が高まることは必然といえるだろう。

Meinel は「人間における運動発達の過程は、人間がその社会において多様な形式で経験する意識的ないし無意識的な影響によって決定的に促進さ

れ」³⁾ 人間は様々な機会や過程を通じて運動を発達させていくという。特に幼児期の運動の発達は急速で、並列性、同時性をもって進んでいくことに特徴があり、適切に指導された場合は、「おとなの運動系の発達ときわめて近い状態になる」⁴⁾ ため、この年齢における環境の影響は、運動発達にとって極めて大きい意義をもつと述べている。さらに、三木は「運動発達には個体の機能成熟、とりわけ中枢神経系の機能成熟が大きなかかわりをもつことになるが、いろいろな子どもが個々の運動形態をきわめてさまざまな時点で出現させることを考えれば、環境からの作用と運動系の反応によって規定されていることも見逃せない」⁵⁾ と述べている。

幼児の運動発達と環境との関係を調べた研究はいくつか報告されている。河村ら⁶⁾ は運動技能の獲得と、園での運動経験との関連を調査し、園での活発度と運動技能に関連性がみられ活発に動く園児は技能にすぐれていると述べている。さらに、田中⁷⁾ は幼児の一日の生活から運動能力と身体活動について調査し、運動能力と身体活動量には関連性が見られ、運動能力が高い幼児が低い幼児よりも高い身体活動量を示したと報告している。また藤巻ら⁸⁾ は母親の運動に対する態度とその幼児の運動発達の関係を調べ、3歳以降可能になるような遊びや動作においては運動の好きな母親をもつ幼児の方が発達の早いと報告している。これらの報告から、幼児の生活と運動発達には関連があることが分かる。

幼児の運動発達を促すために、保護者や保育者は子どもに運動の指導や援助を行っているが、金子によれば「幼児の動感化現象の身体意識は受動発生の地平に沈んでいるのが普通なのだから、(中略) 指導者が身体移入原理に基づいて観察分析や、交信分析を通して子ども達の貴重な動感化現象を掘り起こす必要がある」⁹⁾ といい、幼児の運動指導の難しさについて述べている。このような認識については保護者や保育所、幼稚園の先生といえども、十分とはいえない。子どもの運動欲求にまかせていけば勝手に運動が発達するだろうと考えたり、子どもの自主性を尊重しすぎるあまり、保護者や保育者は手を

出すべきではないと考えてしまうこともある。

そこで、本研究では幼児期の生活、とりわけ保護者の姿勢に改めて着目し、幼児期の身近な環境である毎日の生活や、幼児の最も身近な存在である母親の関心、期待はどのように影響しているのかを把握し、幼児の運動指導の一助を得ることを目的とする。

方 法

1. 調査対象について

調査対象は神戸市内のT幼稚園の園児の母親45名である。調査した園児の構成は4歳児が22名(男子12名・女子10名)、5歳児が19名(男子13名・女子6名)、6歳児が4名(男子2名・女子2名)である。調査は2007年9月4日(火)にT幼稚園で実施し、こちらが作成した質問紙に回答を依頼した。質問紙の中でも抽象的な設問、例えば「高さ」の定義は、その子にとっての高いと思われるところというように解釈して回答するようお願いした。

2. 質問紙の項目について

質問紙の設問項目1～9は園児の生活習慣に関する項目、設問項目10～24は園児の運動発達や運動に対する確信に関する項目、設問項目25～30は運動に関する親の関心、期待の項目で構成した。運動発達を調べるために設定した運動課題は、教育学的運動学の視座にたつ Meinel の運動の基本形態を参考にした¹⁰⁾。Meinel の分類は以下の通りである。

- ①人間が自分の運動器官だけを使って移動する運動。
 - ②人間が運動をさらに先へ伝えていくために、他の対象物に直接に働きかける運動。
 - ③人間が自分の運動を対象に向かって間接的に伝えるために用具を使う運動。
 - ④固定した体操器械における運動。
 - ⑤人間が移動の為に外力すなわち重力・動物力・風力・モーターの力を使ってする運動。
- ただし、今回は園児が実際に幼稚園や日常生活で

行っていると考えられる運動を選んだので、③と⑤については省略することにした。各課題において「良くできる」の回答が5点、反対に「全くできない」の回答が1点と配点し、運動発達の状況を母親の観察結果から調査した。

3. 分析方法について

園児の運動発達の進み具合を把握する直接的な指標になると判断し、運動課題の達成度に関する設問項目10～24問の個人の得点を合計し、その総合点を平均し、その平均点が4.3点以上のグループを上位群、3.5点～4.2点を中位群、3.4点以下を下位群の三つの群に分類した。三群に分類した理由としては、上位群と下位群の違いが分かりやすくなること、また今後の運動指導における実践場面において活用しやすくなると思ったからである。さらに、子どもの運動発達の進み具合は加齢だけでなく、環境からの影響によっても左右されると考え、今回は環境からの影響に焦点をあてて検討する目的から、年齢の区分をせずトータルで平均点を算出した。各群に該当する園児数を表1にまとめ、各群の園児の運動発達の状況と生活環境、子どもの運動発達に関する親の期待との関連性を検討した。

表1 各群の園児の人数

性別	上位群		中位群		下位群	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
4歳児	1	5	9	4	2	1
5歳児	5	0	5	3	3	3
6歳児	0	0	2	2	0	0
	11		25		9	

4. 人数構成と特徴について

厚生労働省によれば5歳時（0ヵ月～6ヵ月）の平均身長は107.85cm、平均体重が18.14kgであった¹¹⁾。本調査の上位群の平均身長は、厚生労働省の調査の平均とほぼ同じ発育傾向といえるが、平均体重はやや少ない。中位群は平均身長、体重とも厚生労働省の報告とほぼ同じ程度であった。下位群は、

平均体重は厚生労働省の報告と同じ傾向を表したが、平均身長は低かった。

結果と考察

1. 生活環境について

各群の園児の生活環境について、また子どもの運動発達に関する親の関心、期待との関係を考察していく。

(1) 兄弟、姉妹の有無との関係について

一人っ子は3名だった。ここでは兄弟、姉妹のいる園児を対象に考察を進める。兄弟、姉妹のいる割合を図1にまとめた。上位群は兄、姉をもつ園児の割合が、弟、妹をもつ割合より若干少なかった。中位群は兄、姉をもつ園児の割合は、弟、妹をもつ園児の割合と同じであった。一方、下位群は兄、姉をもつ園児の割合が、弟、妹をもつ園児の割合より多かった。兄、姉をもつ園児の方が、年上の相手と遊ぶ機会が多く、その分運動発達が促されると予想していたが、この調査では全体としてそのような様子はいかがえなかった。

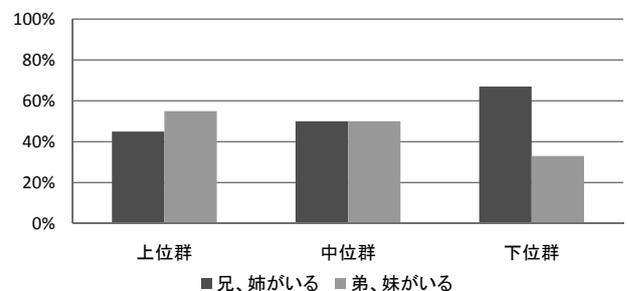


図1 きょうだいの構成

(2) 睡眠時間と規則的な睡眠習慣について

園児の平均睡眠時間と起床、就寝時間、さらに毎日の起床時間と就寝時間が規則的であるかどうかについて尋ねた。

各群の平均睡眠時間は上位群が10時間18分、中位群が9時間54分、下位群が9時間48分と、上位群が若干長い傾向があるが、全ての園児が約10時間程度の睡眠時間だった。また、起床時間の平均は上位群が午前7時18分、中位群が午前7時6分、下位群が午前6時54分と、同じく全ての群がほぼ午前7時頃

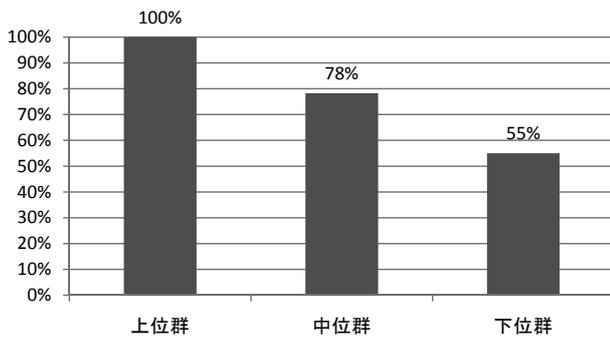


図2 起床・就寝時間が規則的であると答えた割合

だった。平均就寝時間は上位群が午後9時12分、中位群が午後8時54分、下位群が午後9時12分と、これも全ての群が午後9時頃に就寝していることが分かる。この結果は、どの群も厚生統計協会¹²⁾の結果と同じ傾向がみられた。

続いて「起床と就寝時間はいつも決まっていますか?」という、毎日の睡眠が規則的かどうかの結果を、図2にまとめた。上位群は全ての園児が「決まっている」と回答したのに対して、中位群では8割程度が、下位群に関しては半分強の園児しか「決まっている」と答えなかった。通常、通園を始めると園児の起床、就寝時間が一定になる傾向はあるが、今回の結果をみるとその傾向は全ての群に当てはまらないようである。運動発達の進んでいる園児は起床時間と就寝時間が規則的な生活を送っている様子である。

この時期の子どもは、強い運動衝動をもち、起きている間はひっきりなしに動いていることもしばしばある。日頃の生活の中で運動する機会が多い園児は、日中の活動量が十分なことから睡眠がやや長くなっていると思われるが、統計処理をしていないので推測の域である。

(3) 食事の好き嫌いについて

食事の好き嫌いが多い方かどうかと尋ねた結果、好き嫌いが多い方だと回答した割合が上位群は27%、中位群は32%、下位群が66%という結果になり、運動発達が進んでいない群の方が、食事の好き嫌いが多いと答える傾向がみられた。運動発達の進んでいる群の園児ほど、食事の好き嫌いが少ない傾向がみられるが、食べ物の好みや好き嫌いは本人の

好みもある。また、母親が作る毎日の食事内容に大きく左右されるので、一様に運動発達と結びつけることは難しいと考えられる。

(4) 遊びについて

園児の遊びについて外遊びと家遊びに分類して調査した。データ数が少ないため統計処理はしていない。遊びの時間の結果を図3にまとめたところ、各群で外遊び、家遊びに費やす平均時間は、上位群の外遊びの平均時間が1時間48分、家遊びの平均時間が3時間。中位群は外遊びの平均時間が1時間30分、家遊びの平均時間が3時間30分。下位群は外遊びの平均時間が1時間36分、家遊びの平均時間が3時24分であり、全ての群で、外遊びの時間より家遊びの時間の方が長い結果となった。厚生労働省の報告でも、よく遊ぶ場所は「自宅」が最も多く、原っぱなどの自然の場所の回答は低い傾向がみられた¹³⁾。

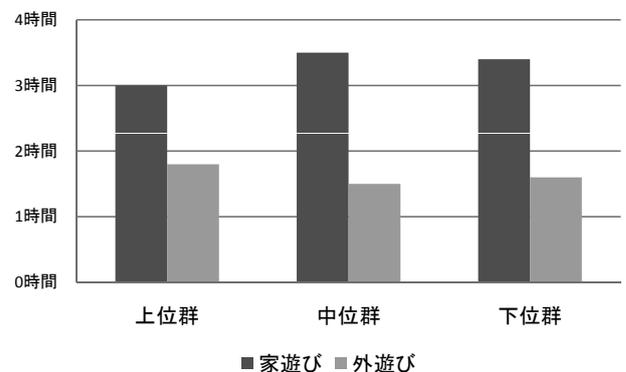


図3 遊び時間について

各群の外遊びの内容を図4にまとめた。上位群が行う外遊びの内容は、鬼ごっこや駆けっこ、自転車やキックボードに乗る遊びであった。中位群は、公

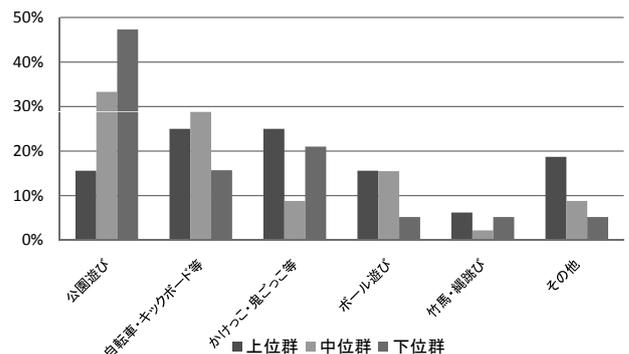


図4 外遊びの内容 (複数回答)

園の遊具を使用する遊びや、自転車やキックボードでの遊びが中心であった。一方、下位群は自由記述の回答から遊びの内容が公園遊びのとの記述が多かった。中でも「砂遊び」の回答がいくつかみられた。

Meinel は運動系の基本概念として運動を「<全身的巧みさ>と<部分的巧みさ>」に分類している¹⁴⁾。「<全身的巧みさ>」は全身の運動系全体のすばらしい協調と理解し、ここでは外遊びを通して行われる運動と考えられる。「<部分的巧みさ>」は手、指、頭、足の動作における精巧な運動系のすばらしい協調¹⁵⁾と理解し、ここでは家遊びを通して行われる運動と考えられる。鬼ごっこ等の遊びでは、近くを走る友達と衝突せずに、追いかけて来る鬼からうまく逃れるという目的のため、すばやく向きをかえる、走る速度を細かく変化させるなどの動きの中で全身的な巧みさが養われる。また、公園で滑り台の梯子を駆け上がり、移動しながら伏臥の姿勢で頭から滑りこんだり、逆登りしてそのまま台から跳び降りたり¹⁶⁾する遊びを通して全身を巧みに使い遊ぶ中で、全体のすばらしい協調の発達が進められると考えられる。公園の砂場で砂や水を使い山や団子を作るなどの遊びを通しては、手や指先をよく使う、部分的な巧みさの発達を進められると考えられる。全身的な巧みさの運動はいったん習得されると、たいていは長い間維持されるし、また「それらがあるとき長い間練習されなくても、すぐにまた“じょうず”になる」¹⁷⁾といい、幼児期に必要な運動として考えると、身体の発育、発達を促す効果もある全身的巧みさを習得することが適切であろう。運動の習得や発達は、「運動者が自ら主体として積極的に外界と対峙し、それと関係を取り結ぶことによってはじめて促され、それらはさまざまな運動経験として蓄積される」¹⁸⁾ので、子どもに欠けているところがあれば、色々な遊びを通してその運動の経験をさせてやるのが大切である。

(5) 習い事について

園児がスポーツ系の習い事をしているかどうかを

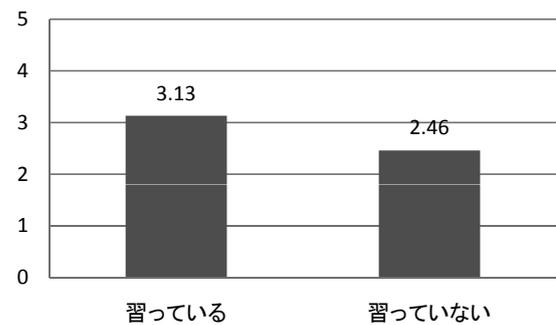


図5 習い事(水泳)の有無別にみた泳げる程度の比較

尋ねた。その結果、上位群は54%、中位群は48%、下位群は33%の結果となり、運動発達が進んでいる群ほどスポーツ系の習い事をしている割合が高かった。習い事の内容は、上位群は水泳が最も多く、体操、球技と続く。中位群の内容は上位群とほぼ同じ傾向だったが、詳しくみるとサッカー、ダンス、スポーツチャンバラの回答があった。下位群も同じく水泳が最も多かった。厚生統計協会の報告ではスポーツ系の習い事をしている割合は半数をこえ、その種類はスポーツ系では水泳、続いて体操の順に多く上位群はこれと同じ傾向といえる¹⁹⁾。

次に、水泳系の習い事していると記述した園児の「泳ぐ」課題の達成度の平均と、水泳系の習い事をしていない園児の「泳ぐ」課題の達成度の平均を図5に示した。その結果、水泳系の習い事していると回答した園児の方が「泳ぐ」課題の発達が進んでいる様子がうかがえた。このアンケート結果から、習い事をする事で補うことができる可能性が示唆された。

2. 運動に対する興味や関心と運動発達の状況について

(1) 運動に対する興味や関心について

子どもが運動を得意と思っているか、運動について興味や関心をもっているかどうかの母親の確信について尋ねた。子どもが運動に対してどのような感じをもっているかを尋ねた結果を図6にまとめた。「運動が得意だと思いますか?」の設問に対し、上位群の親は子どもが「運動することに自信をもっている」と感じているようであり、中位群は「どちらともいえない」と感じ、下位群の親は「あまり得意

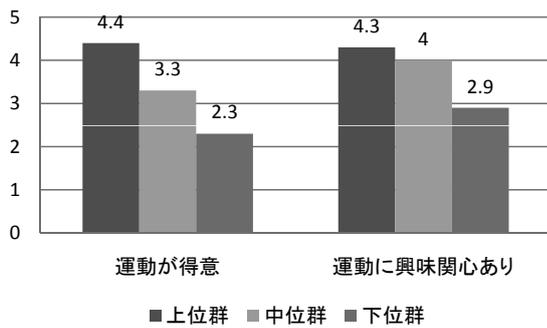


図6 運動に対する意識について

だと思っていない」と感じている様子であった。さらに「運動に対して興味や関心をもっているか？」の設問では、上位群と中位群の母親は「興味や関心があるようだ」と思っているが、下位群の母親は「どちらでもない」と感じている様子であった。

(2) 各群の運動発達の状況について

全ての群の運動発達の結果を図7にまとめた。

1) 上位群の運動発達の状況について

上位群の園児は運動課題の達成度が全体的に高いのは当然のことであるので、ここでは、それぞれの課題の動きかたにどのような特徴があるかを確認しておく。上位群は相対的にみると「鉄棒にぶら下がること」等の、固定した器具の特性に対して自分自身の運動を変化させたり、的確に合わせたりする運動の発達が進んでいるといえる。また「走ること」、「連続して片足でジャンプすること」等の、自分の運動器官のみを使用して移動する運動も発達しているといえる。しかし、同じ移動する運動であっても達成度が低かったのは「泳ぐ」ことだった。やはり水中での運動は非日常の運動形態であるので、経験

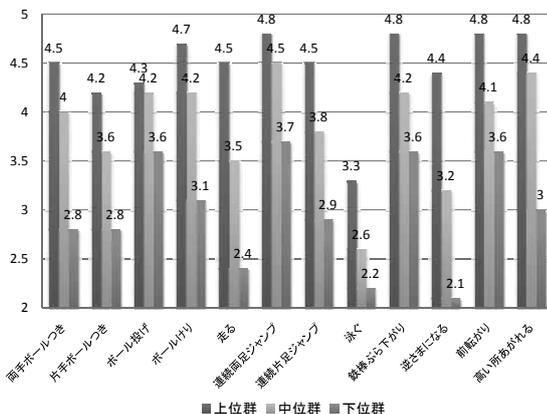


図7 運動発達の状況

の有無に左右される。上位群は幼児期の特徴的な、運動習得の同時性と並列性がみられ、色々な動きかたを同時に習得している状態だと推測できる。

2) 中位群の運動発達の状況について

同じく、中位群の各課題の動きかたにどのような特徴があるかを確認しておく。中位群では「ボールを投げる」や「ボールを蹴る」等の、さらに先に運動を伝えていくために対象に直接的に働きかける運動の発達が進んでいるといえる。一方、中位群は「逆さまになること」の達成が進んでいなかった。逆位感覚は、日常生活では経験する機会がない体位であり、中位群の子どもは非常に恐怖感を感じると考えられる。しかし、最も達成度が低かったのが「泳ぐ」ことだった。現状は、水中で進んでいる程度だと推測される。「泳ぐ」課題は、上位群でもやっと泳げる程度にとどまっていて、上位群でも中位群でも運動課題の中で一番達成度が低かった。

3) 下位群の運動発達の状況について

同じく、下位群におけるそれぞれ課題の動きかたにどのような特徴があるかを確認しておく。相対的にみると、下位群も「ボールを投げる」や「ボールを蹴る」等の対象に直接働きかける運動の発達が進んでいるといえる。また、「両足で連続してジャンプすること」がある程度できているが、「走る」「泳ぐ」「逆さまになること」があまり進んでいない。「泳ぐ」課題が相対的に低い傾向は上位群、中位群にも見られたが、下位群に特徴的であるのは、「泳ぐ」ことよりも「逆さまになること」の逆位感覚が、他群と比較して最も発達していないことであった。逆位感覚が発達していないと、鉄棒での遊びや逆立ちな

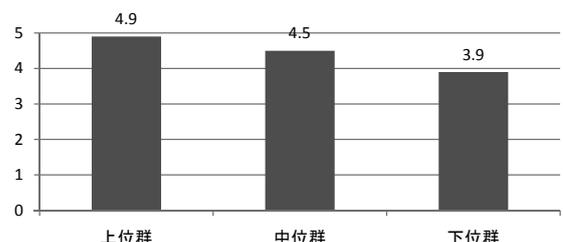


図8 プール遊びが好き

どの習得に影響がでる可能性があるかもしれない。

全体の運動発達を振り返ると、全ての群に共通だったのは「泳ぐ」課題の発達が進んでいないことだった。しかし、子どもが「プールで遊ぶことは好きですか？」の設問の結果を、図8にまとめたところ、全ての群の母親が「子どもがプールで遊ぶこと好きである」と感じているようであった。プール遊びには興味があると母親が受け止めている様子である一方で、「泳ぐ」課題が発達していない状況がみえてくる。水慣れと泳ぐことは大きな隔たりがあるので、そのことを理解しておくことが大切であろう。

3. 子どもの運動発達に対する親の期待について

親が子どもの運動発達についてどのような期待を持っているのか、またそれは子どもの運動発達とどのような関係があるのかを考察する。運動することへの期待、運動と勉強のバランスについて、そして保護者の子ども時代の運動機会との比較の結果を図9に示した。

(1) 運動することへの期待

子どもに「もっと運動してほしいと思いますか」と尋ねた結果、どの群の親もそれなりに子どもに運動してほしいと願っていることがうかがえる。

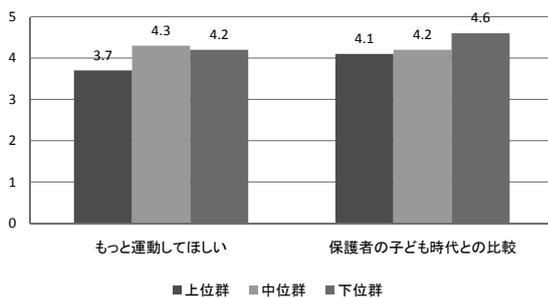


図9 運動に対する期待

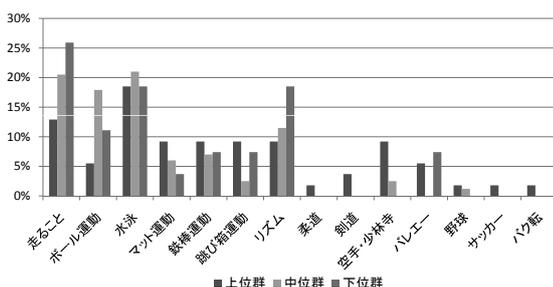


図10 上手にできることを期待する運動内容 (複数回答)

さらに、子どもに「どんなことが上手にできるようになってほしいですか？」と設問した結果を図10にまとめたところ、上位群の親が上手になってほしいと期待した運動内容は「水泳」が最も高く、続いて「走ること」そして「マット、鉄棒、跳び箱運動」など器械運動系と「リズムにのって踊ること」や「空手、少林寺等」が続いた。中位群も「水泳」が最も高く、次に「走ること」となり、期待する順位が上位群とほぼ同じ傾向になった。一方、下位群が最も上手になってほしいと答えた運動内容は「走ること」、次いで「水泳」と「リズムにのって踊ること」であった。下位群の子どもの親も、もちろん「水泳」が上手にできるようになってほしいが、我が子の運動発達の状況を見ると、まずは基本の運動形態である「走る」という動きの習得を願っていると理解できる。

(2) 勉強と運動のバランスについて

「勉強するより、運動ができる方がいいと思いますか」と尋ねたが、この設問に関しては、聞きかたが不適切であったので検討は割愛する。

(3) 保護者の子ども時代の運動機会との比較について

「今の子どもがあなたの時代と比べて運動する機会が少なくなっていると思いますか」と尋ねた結果、どの群の親も、自分の子どもの頃と比較して運動する機会が減少していると考えていた。

(4) 運動に対する期待について

「運動することで何を期待しますか」と尋ねた結果を図11に示した。全ての群を通してみると「元気

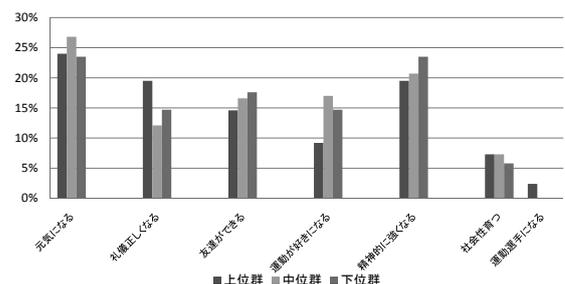


図11 運動することで期待する効果 (複数回答)

になる」ことだった。次に期待するのは「精神的に強くなること」であった。まさに運動は心身ともに鍛えることができるといったところであろうか。一方、上位群は「精神的に強くなる」と同じぐらい「礼儀正しくなる」に期待する回答があった。上位群はすでに運動が好きなので、運動を通して躰や社会性を身に付けてほしいと考えていると思われるが、統計処理をしていないのであくまで推測の域である。

(5) 運動できない理由について

最後に「今の子どもが運動できない理由は何だと思いますか？」と設問した結果を図12に示した。全体的にみると最も多かった回答は、「運動する場所がない」だった。続いて全ての群に多い回答だったのが「危険なことが多い」という安全に関する内容だった。厚生労働省の調査でも遊び場所で気にかかることでは「遊び場や周辺に危険なところがある」という回答が多く、親が安心して子どもを遊ばせる遊び場が少ないと感じていると理解できる。続いて、多い回答だったのが「他に楽しいことがあるから(ゲームなど)」だった。厚生労働省の調査²⁰⁾では、コンピューターゲームをする子が半数以上という報告と同じ傾向だった。

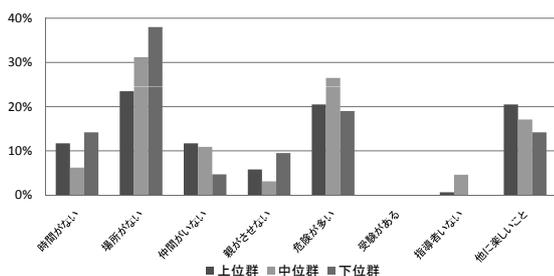


図12 運動できない理由(複数回答)

まとめと課題

園児を取り巻く環界が運動発達とどのように関連しているか、縦割り保育も視野に入れ全体的に把握することを試みたが、今回のデータ数やアンケート内容では十分といえなかった。また、母親に対するアンケートだけではなく、園児の動きを観察し運動

発達の達成度を確認したり、年齢や性別を基礎に運動発達と生活環境を検討することも必要であった。

幼児の運動発達を順調に進めるためには、子どもが獲得する運動の機会を増やしたり、運動欲求を喚起させたりすることが大切である。さらに、子ども自らが新しい運動に挑戦し、偶然にでもできた時には、たとえそれが完全な形ではなくても共感し、励ましてやることが大切といえる。なぜなら、子どもは運動を通して、恐怖心に打ち勝つ、または困難を克服する機会に出会い、それらを乗り越えたことによって得られる達成感、自信、喜びの経験は人間形成の重要な機会といえるからである。

金子によれば、母親は「刻々に移り変わる動きのかたちを注意深く観察し、わが子の動きのレベルに愛情をもって共振しながら、辛抱よく自らの力で歩き出すのを誘うすばらしい運動指導者」²¹⁾であるという。子どもの運動発達を促す役割を担う保護者や保育者には、子どもが運動する周辺条件のみに関心をもつのではなく、子どもが身につけようとする運動に対してどんな動きの感じをもち、身につけようとするためにどんな悩みをもちながら動いているのかを共感できる感性をもった指導者になってもらいたい。そのためには、まず保護者の現状について

幼児の運動に関する調査

人間が発達、成長し創造的な活動を行っていくために体力は不可欠なものであり、「人間力」の重要な要素の一つになります。しかし、今日の子どもの体力、運動能力は低下が問題になっています。スポーツ振興基本計画では、子どもの体力向上を国民運動として展開させることが望まれています。そして、家庭へのアプローチとして、保護者をはじめ国民全体が子どもの体力の重要性を正しく理解し、学校教育、家庭、地域が連携して体力向上を目指す必要があると提言しています。そのためには、幼児期からの運動遊びや動きづくりが大切になります。本調査はその基礎的な資料として、幼児の実態と運動発達の状況を調査するものです。お答えいただきます調査結果は、学術的な研究を目的に統計的な処理をしますので個人が特定できるようなことや、個人情報が出ることは絶対にありません。本調査に御協力をよろしくお願致します。

お子さんについてお尋ねします

- 性別と現在の年齢は？ 性別 (男・女) ・ 年齢 (才 月)
- 兄弟・姉妹はいますか？ (いる・いない)
 - 「いる」と答えた方にお尋ねします。兄弟・姉妹の構成は？ (例：年長から男、女、男) ()
- アンケートに答えて下さっているお子さんは、何男・何女ですか？ ()
- 現在の身長と体重は？ 身長 (cm) ・ 体重 (Kg)
- 起床と就寝時間はいつも決まっていますか？ (決まっている ・ 不規則である)
- 睡眠時間はどのくらいですか？ 起床 (時頃) ・ 就寝 (時頃) 睡眠時間 (平均 時間)
- 食事の好き嫌いは多い方ですか？ (いいえ ・ どちらでもない ・ はい)
- 遊びは外遊びと家遊びどちらが多いですか？ (外遊び ・ 家遊び) (外遊び平均 時間) ・ (家遊び平均 時間)
- 外遊びはどんなことをして遊んでいますか？ (複数回答可) ()
- 家遊びではどんなことをしていますか？ (複数回答可) ()
- 習い事はしていますか？ (している ・ していない)
 - 「している」と答えた方にお尋ねします。どんな習い事をしていますか？ (複数回答可) スポーツ系・音楽系・美術系・舞踊系・学習塾系・その他 ()
 - スポーツ系と答えた方に尋ねします。どんなスポーツで週に何回ぐらい、時間はどれくらいですか？ (スポーツ名) (週 回) (一日 時間) (スポーツ名) (週 回) (一日 時間)

- 運動は得意な方だと思いますか？ (1.とてもそう思う 2.思う 3.どちらでもない 4.思わない 5.全くそう思わない)

11. 運動に対して興味や関心をもっていますか？
(1.とてもそう思う 2.思う 3.どちらでもない 4.思わない 5.全くそう思わない)
12. 走ることは得意だと思いますか？
(1.とてもそう思う 2.思う 3.どちらでもない 4.思わない 5.全くそう思わない)
13. 両手でうまくボールを突くことができますか？
(1.うまくできる 2.まあまあできる 3.何とかできる 4.ほとんどできない 5.全くできない)
14. 片手でうまくボールを突くことができますか？
(1.うまくできる 2.まあまあできる 3.何とかできる 4.ほとんどできない 5.全くできない)
15. ボールをうまく投げるできますか？
(1.うまくできる 2.まあまあできる 3.何とかできる 4.ほとんどできない 5.全くできない)
16. ボールをうまく蹴ることはできますか？
(1.うまくできる 2.まあまあできる 3.何とかできる 4.ほとんどできない 5.全くできない)
17. 連続して両足でジャンプすることができますか？
(1.リズム良くできる 2.できる 3.連続ではないができる 4.ほとんどできない 5.全くできない)
18. 連続して片足でジャンプすることができますか？
(1.リズム良くできる 2.できる 3.連続ではないができる 4.ほとんどできない 5.全くできない)
19. 前に転ぶことができますか？
(1.うまくできる 2.まあまあできる 3.何とかできる 4.ほとんどできない 5.全くできない)
20. 鉄棒などにぶら下がることができますか？
(1.安定してできる 2.できる 3.何とかできる 4.ほとんどできない 5.全くできない)
21. 逆さまになることができますか？
(1.できる 2.少し怖がるができる 3.何とかできる 4.ほとんどできない 5.全くできない)
22. 高いところ上がるすることができますか？
(1.できる 2.少し怖がるができる 3.何とかできる 4.ほとんどできない 5.全くできない)
23. プールで遊ぶことは好きだと思いますか？
(1.とてもそう思う 2.思う 3.どちらでもない 4.思わない 5.全くそう思わない)
24. 泳ぐことができますか？
(1.上手に泳げる 2.少しは泳げる 3.何とか泳げる 4.全く泳げない 5.水に入れない)
25. もっと運動をして欲しいと思いますか？
(1.とてもそう思う 2.思う 3.どちらでもない 4.思わない 5.全くそう思わない)
26. どのようなことが上手にできるようになって欲しいですか？(複数回答可)
- | |
|--|
| 1. 走ること 2. ボール運動 3. 水泳 4. マット運動 5. 鉄棒運動 6. 跳び箱運動
7. リズムに乗って踊ること 8. 柔道 9. 剣道 10. 空手・少林寺 11. バレー
12. その他 () |
|--|
27. 勉強するより、運動ができる方がいいと思いますか？
(1.とてもそう思う 2.思う 3.どちらでもない 4.思わない 5.全くそう思わない)
28. 運動することで何を期待しますか？(複数回答可)
- | |
|--|
| 1. 元気になる 2. 礼儀が正くなる 3. 友達ができる 4. 運動が好きになる
5. 精神的に強くなる 6. 社会性が育つ 7. 運動選手になる 8. 希望の学校に入れる
9. 何も期待しない 10. その他 () |
|--|
29. 今の子どもはあなたに時代に比べて運動することが少なくなっていると思いますか？
(1.とてもそう思う 2.思う 3.どちらでもない 4.思わない 5.全くそう思わない)
30. 今の子どもが運動できない原因は何だと思いますか？(複数回答可)
- | |
|---|
| 1. 運動する時間がない 2. 運動する場所がない 3. 仲間がいない 4. 親が運動させない
5. 危険なことが多い 6. 受験があるから 7. 指導者がいない
8. 他に楽しいことがある(ゲームなど) 9. その他 () |
|---|

御協力ありがとうございました。

の理解が必要であると考え、今回は実態調査を試みた。今後は、子ども一人ひとりの運動発達がより良く進められるために、さらに踏み込んだ研究を実施し、幼児の運動指導について検討を重ねていきたい。(注) 環境世界のこと。現象学事典によれば、動物にとっての〈環境世界〉とは、その動物が知覚するもののすべてと、その動物が働きかけるもののすべて、いわばその動物にとってく有意

味>なものゝ総体という。〈環境世界〉は、知覚し作用する主体ぬきには存立しえないものであるし、またそれぞれの種の感覚器官や運動器官の種類や構造に応じて、種によってそれぞれ異なるものである²²⁾

- 1) Adolf Portmann 著 高木正隆訳『人間はどこまで動物か』p62 岩波書店 1961年
- 2) Kurt Meinel 著 金子明友訳『スポーツ運動学』p284 大修館書店 1981年
- 3) 前掲書2) p275
- 4) 前掲書2) p299
- 5) 金子明友・朝岡正雄編著『運動学講義』p111 大修館書店 1990年
- 6) 河村・村岡・鎌田・松本著「幼児の運動発達に影響を及ぼす環境的要因について(1)―園における運動経験との関連について―」日本保育学会大会研究論文集 第39巻 p568-569 1986年
- 7) 田中千恵著「幼児の運動能力と身体活動における関連について―5歳児の一日の生活からみた身体運動量を中心として―」保育学研究 第47巻第2号 p8-16 2009年
- 8) 藤巻・林・志村著「母親の運動の好き・嫌いと子供の運動発達」日本保育学会大会研究論文集 第43巻 p472-473 1990年
- 9) 金子明友著『スポーツ運動学』p37 明和書店 2009年
- 10) 前掲書2) p101-103
- 11) 厚生労働省ウェブサイトを 厚生労働省雇用均等・児童家庭局「平成12年乳幼児身体発育調査報告書」
<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001047588>
平成23年1月：平成13年10月
- 12) 厚生労働省大臣官房統計情報部編「第6回21世紀出生児縦断調査(平成18年度)」
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/syusseiji/06/kekka2.html>
財団法人厚生統計協会 平成23年1月：平成20年

4月18日

1982年

- 13) 前掲書12)
- 14) 前掲書2) p255
- 15) 前掲書2) p258
- 16) 石井美晴・菊池秀範編『保育の中の運動あそび』p201-202 萌文書林 1994年
- 17) 前掲書2) p258
- 18) 吉田茂著「子どもの運動発達と運動課題」体育科教育第44巻 第15号 p15 大修館書店 1996年
- 19) 前掲書12)
- 20) 前掲書12)
- 21) 東洋・小澤俊夫・宮下孝広編『児童文化入門』金子明友著「スポーツと子ども」p139 岩波書店 1996年
- 22) 木田元他編『現象学事典』p71-72 弘文堂 1993年

参考文献

- ・全国保育団体連合会編『保育白書2007年版』保育研究所 2007年
- ・社会福祉法人 恩賜財団母子愛育会 日本子ども家庭総合研究所編『日本子ども資料』中央出版 2009年
- ・ベネッセ教育開発センター『第4回幼児の生活アンケート』株式会社ベネッセコーポレーション 2010年
- ・吉田伊津美著「動きを育てる親の役割」子どもと発育発達Vol.7 No.4 p240-243 杏林書店2010年
- ・金子明友監修 吉田茂・三木四郎編『教師のための運動学』大修館書店 1996年
- ・三木四郎著『新しい体育授業の運動学』明和出版 2005年
- ・金子明友著『身体知の形成(上)』明和出版 2005年
- ・金子明友著『身体知の形成(下)』明和出版 2005年
- ・浅田隆夫編『幼児の運動教育』学術図書出版